

東吳日語教育學報第 51 期

2018 年 9 月，頁 87-109

從言語與文化融合的觀點試探翻譯教育應有的面貌之一端： 以輔仁大學日本語文學系的翻訊教育為例

楊錦昌

林文瑛

輔仁大學日本語文學系教授 輔仁大學日本語文學系講師

摘要

台灣近年在教育部推動「多國語文與文化連結課程計畫」下，日語教學融合語言與文化的議題再次成為話題，因此本文試圖乘此風潮，從語言與文化融合的觀點，探討翻譯教育應有的面貌。具體論述從日語教學場域「輔仁大學日本語文學系」的翻譯教育概要出發，接著透過實例論述翻譯教學中的言語與文化問題，並針對翻譯教育應有的面貌提出個人觀點。

關鍵詞：語言，文化，翻譯，翻譯教育，言語與文化融合

言語と文化の融合の視点から見る翻訳教育におけるあるべき姿の一端

—輔仁大学日本語学科の翻訳教育を例に—

楊錦昌

林文瑛

輔仁大学日本語文学系教授 輔仁大学日本語文学系講師

要旨

台湾では近年教育部が推進している「多國語文與文化連結課程計畫」のもとにおいて、日本語教育における言語と文化の融合の問題が改めて提起されるようになってきた。そこで、本稿は、こうした研究動向に基づき、言語と文化を融合した視点から翻訳教育におけるあるべき姿を探ることを試みる。具体的には、先ず日本語の教育現場としての輔仁大学日本語学科の翻訳教育の概要を述べ、次いで実例を挙げつつ翻訳教育における言語と文化に触れた上で、翻訳教育におけるあるべき姿を提起する。

キーワード：言語、文化、翻訳、翻訳教育、言語と文化の融合

**Exploring the Proper Ways of Translation Education Based
on the Perspective of Fusion of Language and Culture:
Translation Education of the Department of Japanese
Language and Culture at Fu Jen Catholic University as an
example**

Yang, Chin-chang

Professor, Department of Japanese Language and Culture Fu Jen Catholic
University

Lin, Wen-yin

Lecturer, Department of Japanese Language and Culture, Fu Jen Catholic
University

Abstract

In Taiwan, following the “Language Competence & Cultural Diversity Cultivation Program,” promoted by the Ministry of Education, the topic of fusion of language and culture in Japanese education has once again been in the spotlight in recent years. Therefore, following the trend, the present paper attempts to explore proper ways of translation education from the viewpoint of the fusion of language and culture. First of all, we introduce the guidelines of translation education of the Department of Japanese Language ,Literature & Culture at Fu Jen Catholic University. And then we discuss the issues of language and culture in translation teaching by showing examples. Finally, we propose ideas on the proper ways of translation education.

Keywords: language, culture, translation, translation education, fusion
of language and culture

言語と文化の融合の視点から見る翻訳教育におけるあるべき姿の一端

—輔仁大学日本語学科の翻訳教育を例に—

楊錦昌

林文瑛

輔仁大学日本語文学系教授 輔仁大学日本語文学系講師

1. 始めに

言語が文化と密接に結び付いて存在するものであるからには、言うまでもなく、言語教育を文化と切り離して扱うことは望ましくない。いわゆる言語と文化を融合させた外国語教育とは、文化という要素に基づき、その観点を取り入れ、それに基づき進める教育であると言えよう。この問題は、近年台湾において、教育部（日本の文部科学省に相当）が推進している「多國語文與文化連結課程計畫¹」のもとで改めて注目されることとなった。「台湾日語教育学会」の行った「2015 年日語教學研究座談會—日本語文與文化連結創新課程探討—」及び「2016 年台灣日語教育研究國際學術研討會—融合語言與文化之日語教育—」²等の座談会やシンポジウムは、こうした問題に向けての活動の代表的な例である。また、言語、文学、文化、翻訳の分野を横断する視点から、2010 年に設立された輔仁大学「跨文化研究所」もその例の一つである。今回は、こうした研究動向に基づき、言語と文化の融合の観点に着眼し、日本語教育における翻訳教育について論じることを試みたい。

筆者はこれまでに以下に示すいくつかの翻訳に携わった成果を発表しているが、その総量は十分に多いというわけではない。またそこで扱ったものは文学、社会文化、言語などの方面に偏る。しかも、

¹ 「基礎語文及多元文化能力培育計畫」の一つである。これについては <http://lcp.nccu.edu.tw/> に詳しい。

² 前者は、2015 年 10 月 3 日に東海大学で行われた座談会であり、後者は、2016 年 11 月 26 日に東呉大学で行われたシンポジウムである。本文においてこの座談会及びシンポジウムの名称に関する表記は、繁体字中国語のままにしておく。

一部は、グローバル時代を迎える前の時期のものであり、翻訳教育に生かせるものは限られる。

- ① 楊錦昌訳（1999）「源氏物語和歴史物語的關連」『源氏物語是什麼？第一屆源氏物語國際會議論文集』麥田出版
- ② 林文瑛訳（1999）「源氏物語與近代文學：以田邊聖子『新源氏物語 霧濃的宇治之戀』」『源氏物語是什麼？第一屆源氏物語國際會議論文集』麥田出版
- ③ 楊錦昌・林文瑛共訳（2000）『東京媽媽町之夢』遠流出版社
- ④ 楊錦昌訳（2001）「小川国夫エッセイ 4 篇（フランキー堺さんを偲ぶ、河原の美しさ、K教授の場合、名犬ビー公）」『昼行灯ノート』文藝春秋
- ⑤ 楊錦昌訳（2003）「台湾語訳啄木詩歌. 酒のかなしみぞ我に来れる」『漂白過海の啄木論述：國際啄木學會台灣高雄大會論文集』台灣啄木學會編著
- ⑥ 楊錦昌・林文瑛共訳（2004）『最新日本敬語實例事典』商周出版社

その上、翻訳の授業を担当した経歴は十分に長いというわけではなく、また、多くは語学訓練を中心にした教育が重んじられた時代に筆を取ったものである。そのため、日本語教育の現場において、「文化」という概念に基づく教育を導入することはあっても、日本語教師としては、強くそれを念頭に置いて翻訳の授業に連動させようという意識は稀薄であった。のみならず、グローバリゼーションが深化する時代以前のことであるだけに、ここで当時の翻訳教育に関して改めて報告を行っても、得るものをさほど期待できるわけではない。そこで、本稿では、筆者がこれまで関心を寄せてきた問題に整理を加えるべく、筆者の属している輔仁大学日本語学科の翻訳教育の概要を先ず取り上げた上で、言語と文化の融合の視点に基づき、翻訳教育におけるあるべき姿の一端について考察を加えることにしたい。考察に先だって、言語と文化の融合の視点から論じた翻訳教育に関する先行研究を顧みておくこととする。

そこで日本語の「翻訳」というキーワードで台湾国家図書館「臺灣期刊論文索引系統」を通して日本語教育での翻訳教育の先行研究を調査したところ、翻訳関係の論考がおよそ 58 本ヒットした。その中には、翻訳理論³、文化翻訳⁴、日台または日中対照の作品に関する翻訳問題⁵、翻訳者研究⁶、翻訳学習支援システム⁷、など細分化された専門的論考が少なくないものの、日本語教育に関わる翻訳教育の論考については多いとはいえない。一方、日本語教育に関わる翻訳教育の論考であっても、それらは、「日中翻訳と日本語教育一直訳・意識表現から考察⁸」「翻訳授業についての一試案—加訳と減訳の早期導入を目指す練習法⁹」「テキストのタイプ別から見た翻訳指導の改善対策—日本語学科三年生を例として¹⁰」等の論考のように、主に翻訳のテクニックや日本語の文構造に着眼して論じたものであり、言語と文化を融合させた視点に欠ける。言語、翻訳、文化の三者に着眼して論じているのは、わずかに「翻訳と文化的認知との関連性について¹¹」という論考に過ぎない。この論考は、翻訳教育の

³ 傅玉香（2013）「台湾における桃太郎話とその変容—翻訳理論の観点からの考察」『國立屏東商業技術學院學報』15（pp. 49-70）

⁴ 王佑心（2013）「『文化翻訳』の角度から読む永井荷風『あめりか物語』一人の外遊者の異文化体験」『台灣日本語文學報』34（pp. 103-126）、佐藤敬子（2016）「永井荷風『ふらんす物語』論—文化翻訳の解釈試論」『日本語日本文學』45（pp. 41-58）、中村祥子（2017）「2013 年宝塚歌劇団台湾公演にみる文化翻訳—古龍『楚留香新傳』から小柳菜穂子脚本『怪盗 楚留香外伝—花盗人』へ」『日本語日本文學』46（pp. 15-34）といった論考がある。

⁵ この問題についての論考の例としては、林玉恵（2016）「日中同形語の翻訳に関する一考察—『窓ぎわのトットちゃん』の訳語をめぐって」『世新日本語文研究』8（pp. 85-107）、周欣佳（2009）「翻訳文学の対照分析—中日言語に於けるパトスのレトリック」『臺大日本語文研究』18（pp. 135-157）等がある。

⁶ 鄧敏君（2013）「原文との対照からみた翻訳者個人のスタイルに関する研究—劉慕沙の翻訳作品を例に」『日本語日本文學』39（pp. 90-114）

⁷ 施列庭（2012）「日本語構文解析技術を利用した翻訳学習支援システムの構築と利用効果」『台灣日本語文學報』19（pp. 84-112）

⁸ 邱榮金（1997）『台灣日本語文學報』12（pp. 109-147）

⁹ 林寄雯（2010）『淡江日本論叢』22（pp. 241-256）

¹⁰ 蔣千苓（2013）『淡江日本論叢』27（pp. 97-116）

¹¹ 邱榮金（2008）『台灣日本語文學報』23（pp. 113-130）

現場で「コピー食品の“イクラ”を“伊固拉”と中国語訳したのを見て」感じたという執筆動機から、「翻訳と文化的認知」、「文化的言葉の翻訳基準」、「社会習慣の認知による翻訳」の三つの側面を通して論じた上で、「文化に深く根差したもの」でも翻訳が可能であることを示しつつ、翻訳における文化認知の重要性のほか、語学教育や学習面での重視を説いて、以下のように結論づけている。

言語—文化—認知—翻訳の相関性から見て、翻訳者は原文がにらむ表層的意味、深層の意味と場面的意味をきちっと把握して翻訳に着手するべきである。つまり言葉と文化的背景知識と社会習慣による言行または言語に潜む含意を熟知することこそ、正しく適切に翻訳できる条件でもある…（以下省略）（pp. 129）

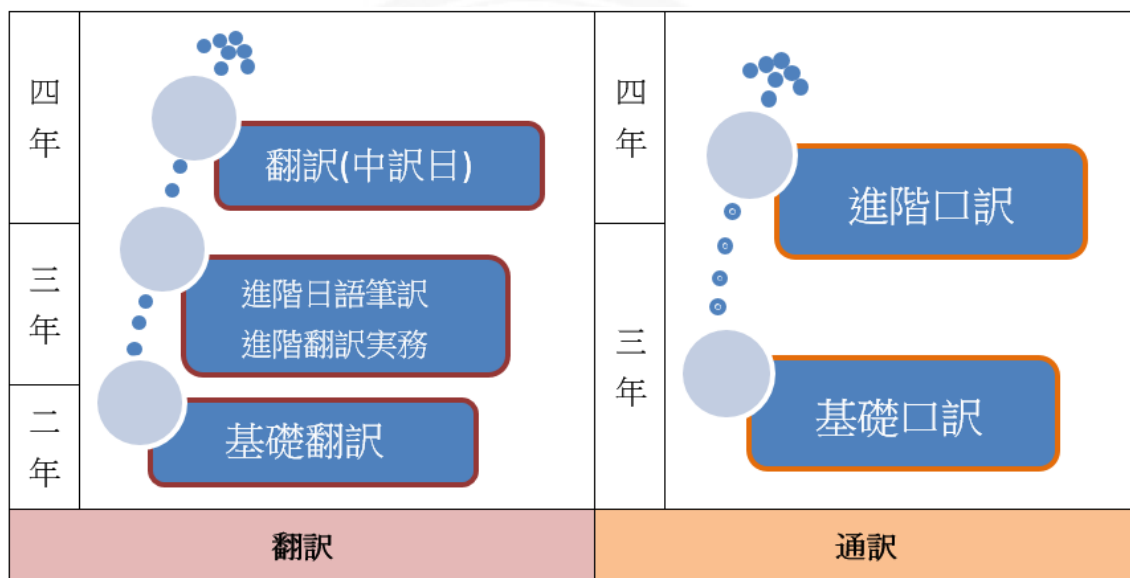
一方、上述した『2016 年台湾日語教育研究國際學術研討會—融合語言與文化之日語教育— 論文集』「日語教育論壇：日語翻譯指導」（pp. 227～248）には本稿の予稿を入れて三本の論文が収録されており、そのうちの一本である曾秋桂氏の「日本語翻訳指導に関して」では、多和田葉子『献灯使』の翻訳作業を通して、「題名の工夫」、「掛詞の多用」、「拔群な言語力の再現」、「語呂遊び」、「巧みな漢字の造詣」の五つの側面等から分析した上で、翻訳は「単なる単語やセンテンスを別な言語に置き換えればよいという問題ではないです。（中略）大抵注釈の形で処理することに統一しました」と述べた上で、修士課程における翻訳教育に触れつつ、本格的な翻訳を目指すのなら、「出来るだけその国の文学、語学、文化により幅広く触れる機会を逃してはならない」（pp. 230）という見解が提起される。一方、張桂娥氏は、「中国語から日本語への翻訳演習におけるアクティブ・ラーニング型授業の試み—台湾東呉大学日本語学科 4 年次選択科目『翻訳実務』の実践を例に一」において、翻訳作業の実践によって得られる観点に着目する曾氏と異なり、アクティブ・ラーニングの実践報告を中心に据え、言語と文化の融合の限られた視点から翻訳教育について論を展開する。

このように、この分野に関する少なからぬ先行研究は本稿を進め

るにあたって大きな啓示を与えてくれるものではあるものの、小論が意図する方向とは些か異なる。そこで、先ず以下に輔仁大学日本語学科の翻訳教育の概要を取り上げることとする。

2. 輔仁大学の翻訳教育の概要

輔仁大学日本語学科の翻訳・通訳関係の授業としては、初級を終え、二年から行われる以下の6つの科目が開設されている。これら6科目のうち、翻訳に関する科目は、二年の「基礎翻訳」、三年の「進階日語筆訳」「進階翻訳実務」、



そして四年の「翻訳(中訳日)」である。四年の翻訳が中国語を日本語に直す科目であるのに対して、二年と三年の翻訳は、すべて日本語を中国語に直す科目である。一方、通訳の授業は、三年の「基礎口訳」と四年の「進階口訳」の二科目である。本稿において特に着目したいのは、一年の日本語学習を終えた二年の必修科目としての「基礎翻訳」についてである。その概要に関して、2016年9月に林文瑛が発表した論文¹²と2016年11月現在開講しているシラバス、

¹² 林文瑛 (2016)「多元識讀觀於「基礎翻譯」課程的實踐與運用」賴振南編『第

及び教師への質問の結果を参考にしながら以下に紹介していきたい。

まず、授業の目標に関して述べる。授業は、以下に示した4つの教育目標に基づいて行われるほかに、「中文」「外国語文與文學（日本語・文化と日本文学）」「閱讀理解（読解）」「文字表達（文字表現）」という「基本素養（基本教養）」と「核心能力¹³（Core competency）（コア・コンピテンシー）」などが直接的な関連項目として位置づけられ、授業に導入される。

項目	目標（日本語）	目標（中国語）
1	日本語の読解力を高めるように、日本語の文型に対する分析能力を身に付けさせること	建立日語文型架構的解析能力，以增進閱讀能力 14
2	日本語の原文を正しく理解したうえで、適切に意味や筋の通る中国語に翻訳できるようにさせること	正確掌握日語原意，適切地翻譯出流暢的中文。
3	「増加」「減少」「省略」「轉換」「融合」といった翻訳の方法を生かして中文、または長文を扱って翻訳できる能力を身に付けさせること	利用「増加」「減少」「省略」「轉換」「融合」等翻譯技巧，處理中、長篇文章。
4	全コースが終わる際、1000字以上の文章を翻訳できる力を持たせること	課程結束時，具備翻譯1000字以上文章的能力

上表に基づけば、授業は主に語学や翻訳の能力の養成に重点が置かれているかのようなものであるものの、「基本素養」の「中文（中国語）」及び「核心能力」として取り上げられる「外国語文與文學」を見れば、語学や翻訳以外の日本語・日本文化・文学なども意識的に取り

11 届兩岸四校研討会論文集：外語人才培育的創意策略』輔大書坊 pp. 183-210

¹³ 本文では「核心行為能力」のことを意味する。

¹⁴ 本来の「建立日語文型架構的解析能力（日本語の文型構造の分解能力を身に付けさせること）」と「增進文章閱讀能力（文の読解力を高めさせること）」の二つの教育目標を一つにしたものである。

上げられていることが分かる。言い換えれば、授業は、実際に、翻訳という概念、翻訳の技術、言語文化の三つの側面を中心に行われ、学習者の翻訳や日本語文化への理解を養成することが意図されている。こうした目標や意図を達成させるために使う教科書や参考書はさまざまであるが、その概要に関しては後ほど改めて述べる。

翻訳の概念及び翻訳の技術の養成に資するものとして『日漢翻譯技巧』¹⁵、『翻譯學導論－理論與實踐』¹⁶『翻譯学入門』¹⁷「學者，作者，譯者」¹⁸といった翻訳関係の著書や論著が挙げられる。これらを参考にしながら、翻訳とは何かという概念を身に付けさせる。さらに、言語文化の理解について、主に『読解：拡大文節の認知』¹⁹という共通教材や持参教材を有効に活用する。具体的には、共通教材や持参教材を通して、語彙、文法、文型のほかに、文の構造分析の指導を行い、学生の日本語の言語能力（読解力）と日本の文化思想への理解のみならず、翻訳という概念、翻訳の技術をも身に付けさせる。また、『文章表現規則』²⁰や日本の小学校の国語科教材を参考にすることもある。

前述した共通教材と持参教材について少し付け加えて説明する。共通教材は、1989年に出版されたものであり、そのためやや古いと思われるが、日本語の構造分析の方法が系統的に示されているので、学生の読解力を高めるのに効果的である。また、外国人向けの教材というだけあって、数多くの文化的な語彙や歴史的要素が入ってお

¹⁵ 靖立青（2001）『日漢翻譯技巧』鴻儒堂書局

¹⁶ 杰里米・芒迪著，李德鳳編譯（2007）『翻譯學導論－理論與實踐』香港中文大學

¹⁷ 「jeremy munday (2008) *introducing translation studies: Theories and applications Second Edition* Routledge Taylor & Francis e-Library」の日本語訳は、ジェレミー・マンデイ、鳥飼玖美子監訳（2009）『翻譯学入門』みすず書房であり、その中国語訳は、初版に基づいて訳した注16の『翻譯學導論－理論與實踐』である。

¹⁸ 余光中（1998）「作者，學者，譯者：“外國文學中譯國際研討會”主題演說」『藍墨水的下游』九歌出版社

¹⁹ 牧野成一、畑佐由紀子（1989）『読解：拡大文節の認知』荒竹出版社

²⁰ 石黒圭、筒井千繪（2010）『文章表現規則』大新書局

り、そのため日本文化や異文化理解の養成に非常に役立つというメリットもある²¹。一方、持参教材は、小學生新聞、短編の新聞記事、コラム、絵本、物語、エッセイなどから取材したものであり、その範囲は非常に広い。それらの例として、料理、 服装、運動、旅行、行事、科学、健康、歴史、地理、童話『泣いた赤鬼』や『一つの花』、絵本『どんなにきみがすきだかあててごらん (Guess How Much I Love You)』などが挙げられる。また、広告やチラシを教材にした試みも行われたことがある。しかしながらそれらは専門用語が多く学習者にとって難しいため十分に広まることはなかった。

次に教授法について述べる。教師により若干異なるものの、基本的には学生をグループに分けて授業の前に翻訳の宿題を学生に ICAN²²というムードルへアップロードさせた後、教師が学生の言語理解の間違いを指摘し、翻訳に対する評価を行ってから、授業中皆で討論するという形式が一般に採用される。さらに日本文化に関する PPT や寸劇の発表²³を取り入れる教師もいる。

上に述べた共通教材や教師の持参教材を使って授業することにより、学習者は、現代の日本社会のあり方だけでなく、茶道、俳句、禅、落語などの伝統文化の他に、柔道、合気道、車の免許、デパート、ラッシュアワー、贈り物などの近現代文化、または貝原益軒など江戸時代儒学者の思想、さらに科学技術が歴史文化や現代社会へ与える影響の実態など、多方面にわたる文化的知識を身に付けることができる。こうして見ると、二年の低学年の「基礎翻訳」の授業においてさえも、学習者の言語能力に加えて、文化知識、そして異文化理解力（異文化コミュニケーション力）を高めさせることができると言える。

こうして「基礎翻訳」の目標、教材、教授法に従って一年間教育を行った結果、注 12 の林の論著に示されているように、学生から一

²¹ 注 12 に同じ。

²² 現在 ICAN の代わりに「TRONCLASS」というムードルが導入されている。

²³ 注 12 に同じ。

年間の翻訳の授業を受けた中で、翻訳において難しいのは日本語を
読解することではなく、如何に素晴らしい中文に訳すかという点で
ある。(學生歷經一年的翻譯演練，經常提到翻譯最困難之處不是日文
的解讀問題，而是如何譯成優美的中文)」のような好意的反応がしば
しば見られる。さらには、以下のようなコメントもある。

項目	学生からの反応（中国語）	学生からの反応（日本語）
1	從課本開始讓我們慢慢累積實力，並透過 PPT 讓我們觀摩其他同學的翻譯，學習如何能翻得更好，這點讓我更喜歡翻譯了	教材からスタートして少しずつ着実に私たちのレベルを高めてくださった一方、PPT を通してクラスメートの皆さんの翻訳を参考にすることにより、どうやったらより良い翻訳ができるかについて身に付けさせてくださったお蔭で、より翻訳というものが好きになった。
2	上課的檢討很棒！	授業での討論はとても良かった！
3	以課本為主先打下基礎的教學方式很有效，跟同學們的討論也有助於我們思考	先に教材を中心にして学習者の基礎を固めさせる教授法は大変効果的で良かった。皆さんと討論することとも思考力に役立った。
4	雖然有時候翻譯量很大，但很喜歡老師上課和同學討論作業的時候，老師也會體諒同學，問同學意見，很喜歡這堂課。	翻訳の量が多いことがあるけれど、授業中先生が学生と一緒に宿題を討論するのが好きです。先生も私達のことを思いやって私達の意見を聞いたりしてくださって、この授業がとても好きです。
5	いろんなタイプの文章を訳させたり翻訳に関する文法を教えたりしてくださってかなり役に立つと思うのです。➡【学生が日本語で書いた文章のうち、誤った表現にわずかな修正を加えて引用した】	

学生のこれらの反応を通して、輔仁大学日本語学科の全体的な「基礎翻訳」の授業の概要と学生の反応が知られる。学生達はこの科目を好意的に捉え、とりわけ授業中に行われる討論に学習意義を認めている。

3. 翻訳教育における言語と文化の融合

以上は、輔仁大学の「基礎翻訳」教育の概要であるが、言語と文化の融合という観点から述べると、授業で取り扱う言語と文化の割合は概ね6対4である。したがって、「言語と文化の融合」を実践した翻訳教育がここに既に期せずして成立していると言えよう。そこで、「日本語教育における言語と文化の融合」というテーマを論じるべく、以下の二つの引用文を通して、实例を見ながら、翻訳教育における言語と文化について改めて考察してみたい。

翻訳と言語・文化の関係については、『跨文化交際翻訳』²⁴において、以下のように提起されている。

翻訳は、ある言語文字（文化）の意味をもう一つの言語文字で表現するものである。現代の記号学の観点から言えば、翻訳の實質は、二つの異なる言語コードをもって同じ思想と意味を表すことである。そのため、翻訳の主な役目は、ソース言語の原文そのものの言語コードを再現する（reproduce）ことではなく、原文そのものの思想を再現することにある。

また、『翻訳教学研究：理論と実践』²⁵においては、以下のように翻訳と言語・文化の関係が示されている。

²⁴ 金惠康(2003)『跨文化交際翻訳』中国對外翻訳出版公司（翻譯是把一種語言文字(文化)的意義用另外一種語言文字表達出來。以現代符號學的觀點來說，翻譯的實質就是以兩種不同的語言符號來表達同一思想、意思。因此，翻譯的中心任務就是再現（reproduce）原文的思想，而不是原文的語言符號。）

²⁵ 高華麗（2008）『翻譯教学研究：理論と実践』浙江大学出版社（翻譯不僅僅與語言有關，解讀好原文字裡行間的文化內涵並加以恰當傳譯，是提高翻譯質量的關鍵。語言中承載的文化因素是翻譯中不可迴避的，譯者一定要有跨文化交際的意識，不要把文化因素當成單純的語言問題來處理。）

翻訳は、言語と関連するだけではなく、原文の言葉世界の奥底にある文化的な要素とも関連する。そこでそれらの文化的な要素の実態を解説した上で適切に翻訳するのは、翻訳の質を高めるのに肝心なことである。

言語にある文化的な要素は、翻訳を行っている時に避けられないものであるから、翻訳者は異文化理解（異文化コミュニケーション）を意識する必要がある。絶対に文化的な要素を単に言語問題として取り扱ってはならない。

上記の二つの引用文は、翻訳とは、言語、言語コード、そして言語問題に止まって扱うべきものではなく、言葉世界の奥底にある文化的な要素や思想を正確に理解した上で行われるものだと主張している。つまり、翻訳という行為について、いずれもソース言語の言語コードを、そのままターゲット言語に転換することではなく、ソース言語の原文の思想のあり方をありのまま切り替えるべきだと言っている。翻訳に関するこうした認識は、大学の翻訳教育にも通用すると考えられる。具体的に言えば、大学の翻訳教育の現場で言葉世界の奥底にある文化的な要素や思想を無視したまま、言語コードや言語問題だけに目を向けて翻訳の授業を行うなら、言語世界の奥底にある文化的な要素の学習の機会を逃してしまう恐れがある。したがって、翻訳をする場合、単に言葉という言語レベルの転換に留まるなら、言葉世界の奥底に存在する文化的な意味を翻訳文に浮かび上がらせることができない。

こうした見解は、本稿の「始めに」において取り上げた曾秋桂氏の述べる「単なる単語やセンテンスを別な言語に置き換えればよいという問題ではない」という立場や、あるいはまた邱榮金氏が提起した「言葉と文化的背景知識と社会習慣による言行または言語に潜む含意を熟知することこそ、正しく適切に翻訳できる条件でもあること」という観点に通じるものである。

この点については、例えば 2013 年 2 月 8 日の『現代ビジネス』「経

済/企業」²⁶に見られる「驕る平家は久しからず---フタバ産業元社長の逮捕にみる名門・優良企業の油断と驕り」という見出しや、あるいは以下の前参議院議員水野けんいち公式サイト「けんいちブログ」に見られる「驕る平家は久しからず」²⁷という 2010 年 6 月 9 日のブログの文章などを挙げて裏付けることができる

『平家物語』の冒頭に“おごれる人も久しからず”という文があります。“驕る平家は久しからず”の語源でしょう。

自民党が 300 議席という空前の大勝をしたのが郵政選挙でした。しかし次の総選挙で議席を 3 分の 1 に減らしました。政策などへの批判もあったでしょうが、驕った姿勢と国民に見られたことも大きかったと思います。

このように、上の二例の間に共通する言葉は、「驕る平家は久しからず」というキャッチフレーズである。記事の見出しに示されているのは、名門・優良企業のフタバ産業の油断と驕りであり、ブログの文章に示されているのは、自民党の驕った姿勢である。もしこの「驕る平家は久しからず」という慣用語を言語コードのレベルでそのまま「驕奢的平家不長久」と中国語に訳したら、どうであろうか。もちろん、意味を理解できないわけではないものの、原文の含意が十全に示されているとはいいがたい。そこでそれを中国語の慣用語の「驕者必敗」に翻訳すれば、中国語話者にとっては抵抗感を覚えずに正しい意味を理解できるであろう。

さらに別の例を見てみよう。『ちはやふる』は 2007 年から連載された作品で、競技かるたを題材にした漫画である。これは、アニメ化の他に映画化もされた。そのタイトルは、台湾で『花牌情縁』という作品名に翻訳された。この作品は、日本和歌を収録する『百人一首』と密接な関連を持つので、果して『花牌情縁』という訳名が適切であるかについては疑問が呈されよう。つまり、中国語の『花

²⁶ <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/34816> (井上久男ジャーナリストの執筆による)

²⁷ <http://mizunokenichi.com/> 「けんいちブログ」に収録されている。

牌情縁』という訳名は、ただ動画や漫画の表面的なものを生かして翻訳したものに過ぎないため、言葉の奥底に潜んでいる文化的な意味を翻訳文に浮かび上がらせているとは言い難い。というのは、和歌の世界で「ちはやふる（ちはやぶる）」というのは、歌枕といって和歌の修辞法に基づくものであり、常に「神」という言葉を導き出すために使われるものだからである。『花牌情縁』という訳名では、言葉の持つ特色や意味が表出されていないため、原文の持つ意味を伝えることが難しい。そこで、仮に『ちはやふる』を『牌^神情縁』と訳せば、よりの確に和歌の世界を象徴することができ、さらには、かるたの名手としてのキャラクターの描写にふさわしいものとなる。その結果、言葉の深層に潜んでいる文化や文学の特質をも表すことができるであろう。

また次の事例は、2016年8月に公開されて台湾でも大ヒットした新海誠のアニメ映画『君の名は。』の訳名についてである。中国語のウィキペディアの『君の名は。』の正式訳名のところに、「臺灣前譯「你的名字是→你的名字。」。但周邊推廣，如環球音樂、OK 超商等仍加上句號²⁸。（台湾で先に提案された訳名は「你的名字是」であったが、グローバルミュージック、OK コンビニといった業者が句点を付けた「你的名字。」を押し広めようとした。）わざわざ注を付けて説明するのは、訳名について何らかの議論や配慮があったためだと思われる。ただ、議論されたのは、恐らく「君の名は」という日本語から中国語への訳名のことではなく、句点を付けるかどうかという点であろう。翻訳そのものについて見れば、「你的名字。」という訳名は、間違いであるとは言えないものの、日本語から出たものではなく、英語の「Your Name.」の意味に合わせたものである可能性が高い。

『君の名は』は、元々は1952年に放送されたラジオドラマの題名で、中国語訳は『請問芳名（お名前は？）』である。その後映画化

²⁸ 中国語に座りが悪いところがあって、筆者が全体的な文脈を理解した上で日本語に翻訳した。

され舞台化され、さらにはテレビ化された。今回、先行作品と区別をつけるべく、故意に句点を付けた『君の名は。』というタイトルにしたのは、多元的な意味を表す一方で、視聴者をして想像力をかき立てる開放的な仕掛けをここに込める²⁹ためのものである。しかしながら、中国語の場合は、句点を付けることによって終止的な意味になるので、句点を付けた「你的名字。」という訳名はかえって開放的な働きを弱めてしまうのではないかと懸念される。また、前述した元の「你的名字是」という訳名を採用すれば、開放的な働きを少しは示せるのではあるが、「是」は断定助動詞であるので、断定表現かまたは疑問表現かのいずれかが後置されることになる。従って、中国語訳の場合は、「。」という句点ではなく、「・・・」という点線を付けて「你的名字・・・」にしたほうが、より一層「君の名は？」「君の名は・・・です。」「君の名は分からない。」「君の名は覚えられない。」「君の名は思い出した。」といった多様な意味を視聴者に連想させ、多くの創造的なイメージを喚起させることができるのではないと思われる。

以上、取り上げた見出しやブログの文章に見られる「驕る平家は久しからず」、漫画・アニメ動画・アニメ映画『ちはやふる』、アニメ映画『君の名は。』における言語コード、文化、そして翻訳に関して述べてきた。「驕る平家は久しからず」と『ちはやふる』の場合は、ソース言語の文化理解の有無と深く関わるものである一方で、『君の名は。』の場合は、中日の文化を載せる言語コードや言語の歴史への異文化理解、または全体の映画の内容への理解と関連するものである。これらの例を通して見ると、言葉の裏にある文化的な意味が分からなければ、より全面的で適切な翻訳をできないことが明らかであろう。翻訳の仕事であれ、翻訳の授業であれ、実際に翻訳を行うにあたっては、言語の奥底にある文化的な要素に対する理解を深めることが欠かせない。そのため、異なる言語及び文化の交流

²⁹ <http://www.yoppy.tokyo/articles/7319>（「新海誠監督と語る「君の名は。」というタイトルに込めた意味」による）

の橋渡し役を担って翻訳に携わる人は、常に異文化理解に留意して翻訳を行うべきである。もちろん、大学の翻訳教育の現場においても同様であり、学生指導をするにあたっては、言語のみに止まらず、常に言語世界の奥底に潜む文化的な要素や思想に目を向け、その関連教材を授業に取り入れるべきである。また、学習者に文化的な要素や思想を理解させた上で、翻訳に携わる時の心構えやその技術をも指導する必要がある。

4. 翻訳教育のあるべき姿の一端―結びにかえて―

翻訳について理想的な姿を求める際、唯一の正解というものが存在するわけではないであろうが、上に述べた点に留意しつつ翻訳を実践すれば、全面的に目配りの効いた適切な翻訳に近づくことができるであろう。そこで、以下では翻訳教育のあるべき姿の可能性について簡単に述べてみたい。

翻訳教育に携わるにあたっては、一般に言語、文化、翻訳の三つの側面が関わってくるであろう。とりわけ言語は、ソース言語の原文の読解力（理解力）とターゲット言語の表現能力との二面性を内包する。そして文化は、自国の文化や異国の文化の理解力に支えられた知識（教養）を裏付けるものであり、また翻訳はそのスキルの洗練さが重要な要素となる。そのため、翻訳の授業においては言語、文化、翻訳の三つの側面に裏付けられた教材やその教授法を取り入れる必要がある。

教材については、「体系性を有し、文化要素が配慮された持参教材」、または「論理性が高く文章や構成の優れた教材」が重要である点を先ず提起しておきたい。

そうした教材として、既に触れたように、輔仁大学の翻訳の授業で使用される共通教材と、幅広く多元的な要素を備えた持参教材の両方が相互補完的に使用されることが望まれる。もし言語と文化の融合を前提にして日本文化の理解力の向上に資することを旨とするのであれば、より体系的で効果的に文化要素が配置された持参教材が

求められる。その場合、前に取り上げた「驕る平家は久しからず」、『ちはやふる』、『君の名は。』といったような教材に見られる言語と文化を結んだ視点は、日本文化理解力や翻訳技術養成のための優れた教材を提供するであろう。また素材を選択する際には、文章の論理性が高く構成の緻密な点にも注意が向けられるべきであろう。でなければ、翻訳教育の指導や学生の学習支援の観点において支障の生じる恐れがある。こうした点についての具体例としては、前掲の「臺灣前譯『你的名字是→你的名字。』。但周邊推廣，如環球音樂、OK 超商等仍加上句號」に見られる『君の名は。』の中国語訳名についての注が挙げられる。

次は、教授法についてである。ここでまず提起したいのは、「気付き」である。

前掲の輔仁大学の学生の反応からも分かるように、翻訳の授業の教授法は概ね学習者に好意的に受け入れられている。また、学生による教師への授業評価の結果は、100点満点に換算してほぼ82～95点である。従って、基本的には、授業前の自律学習、または同級生との協働学習、授業中の宿題に関する討論、学生に対する教師の指導説明など、これらを総合的に取り入れた教授法は、評価されるに値しよう。だが、筆者はそれに加えて「気付き」を強調することを提案したい。すなわち学習者に自分の学習の不十分な点に対して「気付き」の視線を向けさせることである。

というのは、適切な「気付き」によって、学習者の学習意欲が高まると同時に、謙虚さも身につくからである。そこでは、教師の講義のほかに、翻訳の宿題を終えるミッションを達成するための同級生同士の協働学習、ICANやTRONCLASSというムードルでの同級生と教師からの評価、授業での添削や討論、教師による「誤訳」集の提起と公開などが実践され、その結果、訂正した翻訳文の公開といった教室内外の活動を通して、学生をして自分の日本語力、中国語の文章力、文化理解力、そして翻訳の技術や知識に関するレベルに自ら気付かせることになる。また、已に触れたような、論理性が高く

文章力と構成性が優れた教材を使うことにより、ソース言語の構造分析力、読解力、文化理解力を高めさせるための翻訳の授業の目標設定を効果的に行うことができる。さらに学習成果として個人の翻訳文集を作らせ、翻訳の技術を磨かせる一方で、全コースが終わる頃までに、1～2時間で「1000字以上の文章が翻訳できる力を持たせること」という目標設定も視野に入れることができる。

以上の翻訳の授業の教室内外の活動を取り入れる試みにより、言語、文化、翻訳の三側面に関わる能力のほかに、自律学習、チームワーク、異文化コミュニケーション・異文化理解といった核心行為能力（コア・コンピテンシー）も身に付けることができよう。のみならず、「発想、構成、展開」という構成の優れた文章を読んだり翻訳したりすることにより、学生の文章構成能力も高まることが期待できよう。

以上において、翻訳教育におけるあるべき姿の概要を述べてきたが、なお不十分な点も少なくない。大方の御教示を請う次第である。ところで、ジェレミー・マンデイ、鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』には興味深い見解が示されている。すなわち、「パウンドは、中国からの翻訳を、中国語の知識があまりない状態で行っていた。Steiner（P379-380）はこのことが有利であったとみなしている。何故ならば、起点テキストと文化から遠く離れていることにより、翻訳者は先入観や相互接触の混乱なしに作業を行えるからである。」³⁰というものである。この言説に関して筆者が示した下線部を見る限りでは、ここでは、先入観や相互接触の混乱から解放されるためには言語能力や文化理解力が欠けていてもよいと読める。しかし、翻訳教育の現場は、常に言語と文化が融合し、異文化交流が頻繁に行われる「場」であるから、日本語や外国語を専門にする人にとって、あるいは日本語教育の一環としての言語・文化が融合する翻訳教育にとって、日本の言語・文化に関する知識が果たして軽んじられてよいもので

³⁰ ジェレミー・マンデイ、鳥飼玖美子監訳（2009）みすず書房（pp. 269）

あるかどうかについて、検討の余地のある点に目を向ける必要がある。

【付記】本稿は、2016年11月26日に台湾日本語文学会によって行われたシンポジウム『2016年台灣日語教育研究國際學術研討會－融合語言與文化之日語教育－』のフォーラム「日語教育論壇：日語翻譯指導」での発表原稿を基に題名を改めるとともに加筆修正したものである。執筆にあたり、本学の翟翠翎先生及び王麗香先生のご協力を賜りました。この場を借りて御礼を申し上げます。

参考文献

(一) 書籍・機関論文（年代順による）

I 中国語

1. 林文瑛（2016）「多元識讀觀於「基礎翻譯」課程的實踐與運用」
賴振南編『第11屆兩岸四校研討會論文集：外語人才培育的創意策略』新北：輔大書坊 pp.183-210
2. 石黒圭、筒井千繪（2010）台北：『文章表現規則』大新書局
3. 高華麗（2008）『翻譯教学研究：理論与实践』杭州：浙江大学出版社
4. 杰里米・芒迪著、李德鳳編譯（2007）『翻譯學導論－理論與實踐』
香港：中文大學
5. 金惠康（2003）『跨文化交際翻譯』北京：中国對外翻譯出版公司
6. 靖立青（2001）『日漢翻譯技巧』台北：鴻儒堂書局
7. 余光中（1998）「作者、學者、譯者：“外國文學中譯國際研討會”
主題演說」『藍墨水的下游』台北：九歌出版社

II 英語

1. jeremy munday (2008) *introducing translation studies : Theories and applications Second Edition* New York : Routledge Taylor & Francis e-Library

Ⅲ 日本語

1. 中村祥子 (2017) 「2013 年宝塚歌劇団台湾公演にみる文化翻訳—古龍『楚留香新傳』から小柳菜穂子脚本『怪盗 楚留香外伝—花盗人』へ」『日本語日本文學』46 新北：輔仁大学日本語文学系、pp.15-34
2. 曾秋桂 (2016) 『2016 年台灣日語教育研究國際學術研討會—融合語言與文化之日語教育— 論文集』「日語教育論壇：日語翻譯指導（日本語翻訳指導に関して）」台北：台湾日語教育学会、pp. 227-230
3. 佐藤敬子 (2016) 「永井荷風『ふらんす物語』論—文化翻訳の解釈試論」『日本語日本文學』45 新北：輔仁大学日本語文学系、pp.41-58
4. 林玉惠 (2016) 「日中同形語の翻訳に関する一考察—『窓ぎわのトットちゃん』の訳語をめぐって」『世新日本語文研究』8 台北：世新大学日本語文学系、pp.85-107
5. 施列庭 (2012) 「日本語構文解析技術を利用した翻訳学習支援システムの構築と利用効果」『台灣日本語文學報』19 新北：台湾日本語文学会、pp.84-112
6. 鄧敏君 (2013) 「原文との対照からみた翻訳者個人のスタイルに関する研究—劉慕沙の翻訳作品を例に」『日本語日本文學』39 新北：輔仁大学日本語文学系、P90-114
7. 王佑心 (2013) 「『文化翻訳』の角度から読む永井荷風『あめりか物語』—一人の外遊者の異文化体験」『台灣日本語文學報』34 新北：台湾日本語文学会、pp.103-126
8. 傅玉香 (2013) 「台湾における桃太郎話とその変容—翻訳理論の観点からの考察」『國立屏東商業技術學院學報』15 屏東：屏東商業技術學院、pp.49 -70
9. 蔣千苓 (2013) 「テキストのタイプ別から見た翻訳指導の改善対策—日本語学科三年生を例として」『淡江日本論叢』27 新北：淡江大学日本語文学系、pp.97-116

10. 林寄雯 (2010)「翻訳授業についての一試案—加訳と減訳の早期導入を目指す練習法」『淡江日本論叢』22 新北：淡江大学日本語文学系、pp. 241-256
11. ジェレミー・マンデイ、鳥飼玖美子監訳 (2009)『翻訳学入門』東京：みすず書房
12. 周欣佳 (2009)「翻訳文学の対照分析—中日言語に於けるパトスのレトリック」『臺大日本語文研究』18 台北：台湾大学日本語文学系、pp. 135-157
13. 邱榮金 (2008)「翻訳と文化的認知との関連性について」『台灣日本語文學報』23 新北：台湾日本語文学会、pp.113-130
14. 邱榮金 (1997)「日中翻訳と日本語教育—直訳・意識表現から考察」『台灣日本語文學報』12 新北：台湾日本語文学会、pp. 115-175
15. 牧野成一、畑佐由紀子 (1989)『読解：拡大文節の認知』台北：荒竹出版社

(二) ネット資料

1. <http://lcp.nccu.edu.tw/> (基礎語文及多元文化能力培育計画)
2. <http://140.136.251.64/outlines/student/default.aspx> (輔仁大学第二代課程大綱查詢系統)
3. <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/34816> (『現代ビジネス』「経済/企業」)
4. <http://mizunokenichi.com/> (前参議院議員水野けんいち公式サイト「けんいちブログ」)
5. <http://www.yoppy.tokyo/articles/7319> (「新海誠監督と語る「君の名は。」というタイトルに込めた意味」)